湧水湿地を利用する野生動物とその行動

Wild Animals Using Seepage Marsh and Their Behavior

○富田啓介（愛知学院大学）
○Keisuke TOMITA（Aichi Ggakuin University）
tomita@dpc.agu.ac.jp

1. はじめに

湧水湿地とは、地下水のにじみ出しによって形成された鉱質土壌をもつ小規模な湿地であり、東海・近畿・瀬戸内地方の丘陵地を中心に広く分布している。こうした湿地には、地域固有種や絶滅危惧種を含む生物群集が確認される一方、分布域が都市圏に近く、高度成長期以降の開発圧の高まりの中で急速に減少していることから、保全上重要な生態系である。

湧水湿地に見られる生物群集に関して、植生や昆虫については多くの報告があり、その特徴の理解はかなり進んでいる。対して、そこを利用する哺乳類や鳥類（以下野生動物と呼ぶ）の種類や行動についてはほとんど調べられていない。この状況にもかかわらず、イノシシによる湿地地表の攪乱、アライグマなど外来動物の侵入、鳥類による希少種の散布といった野生動物の行動が保全上の要諦と指摘されており、これらをより深く検討するには客観的かつ定量的な情報が必要である。そこで本報告では、湧水湿地を利用する野生動物とその行動に関する基礎的知見を得るため、愛知県内の湧水湿地で行っているカメラトラップ調査の結果を検討する。

2. 対象地域と調査方法

愛知県豊田市 2 カ所・瀬戸市 1 カ所・長久手市 1 カ所の合計 4 カ所の湧水湿地内に、赤外線センサーを用いた自動撮影カメラを設置し、静止画と動画を連続して撮影した（長久手市は静止画のみ）。1 回の撮影（静止画・動画の片方または両方）を 1 イベントとして集計を行った。ただし、同一種の野生動物が 5 分未満の間隔で連続して撮影された場合は、撮影回数によらず 1 イベントとし、また、1 回に撮影された個体が複数でも 1 イベントとした。調査は年間を通したデータを得ることを目的とし、2017 年 2 月～4 月に開始し同年 9 月現在継続中である。本要旨上では、同年 6 月 6 日までに得られたデータに基づいた結果を示す。

3. 結果

哺乳類では、4 カ所の湿地を通じてイノシシ・タヌキ・ハクビシン・ノウサギなど 11 種（分類群）が撮影された。すべての湿地において、イノシシのイベント数が最多だった。鳥類では、同じくキジバト・シロハラ・ハシボソガラスなど 14 種が撮影された。動画撮影を行った 3 カ所において行動を分析すると、湿地を横切る「移動」が多かったが、水飲みや採餌の場としても利用されていた。イノシシでは、地面の掘り返しや泥浴びの行動も確認された。

謝辞 : 豊田市における調査は、豊田市史編纂業務の一環として実施した。長久手市におけるデータは、長久手市役所環境課から提供を受けた。瀬戸市における調査は、科研費（課題番号 : 15H02858）の支援を受けて実施した。
キーワード : 湧水湿地、野生動物、環境利用、カメラトラップ法、愛知県